

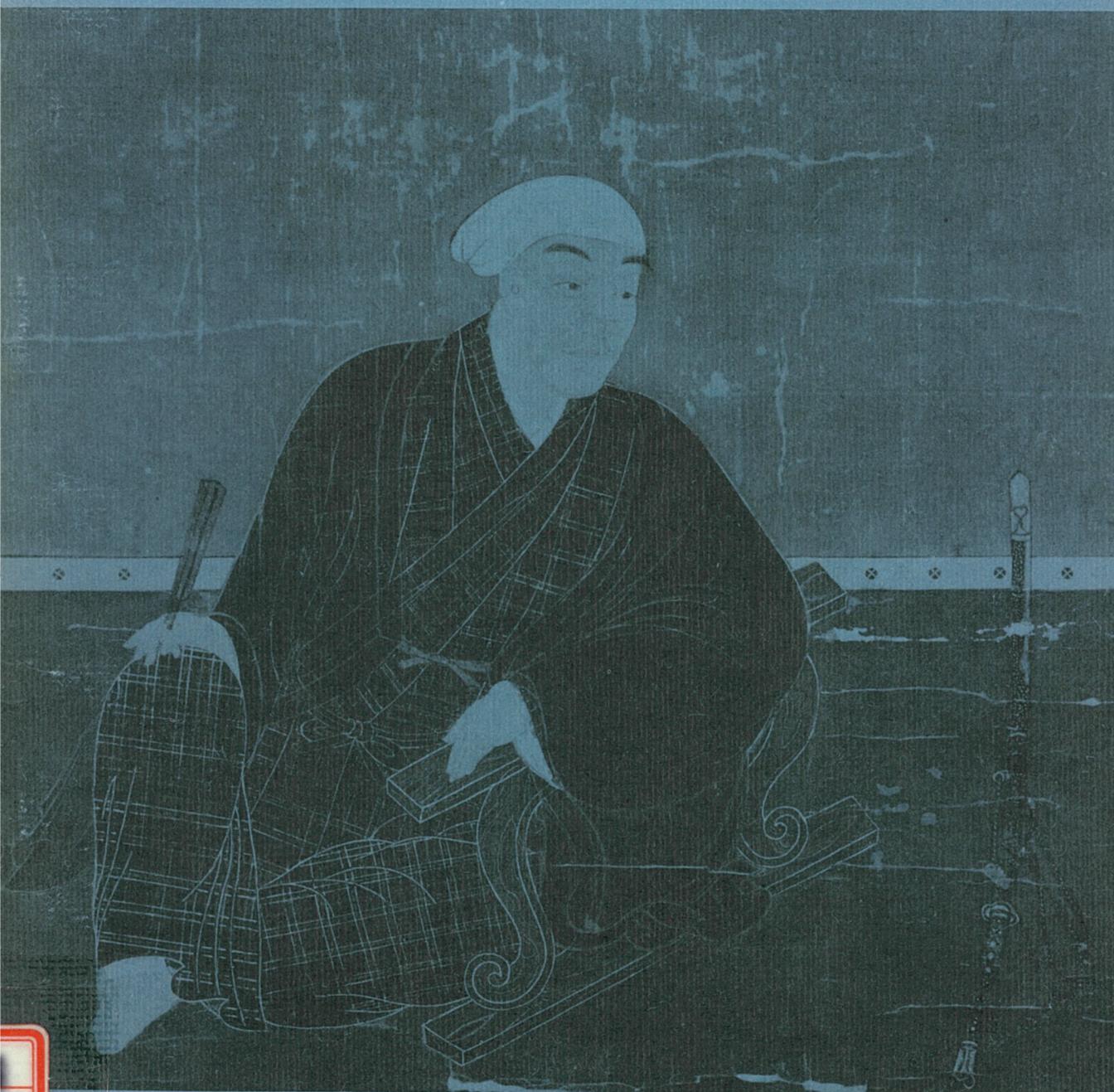
福岡城跡工

10095

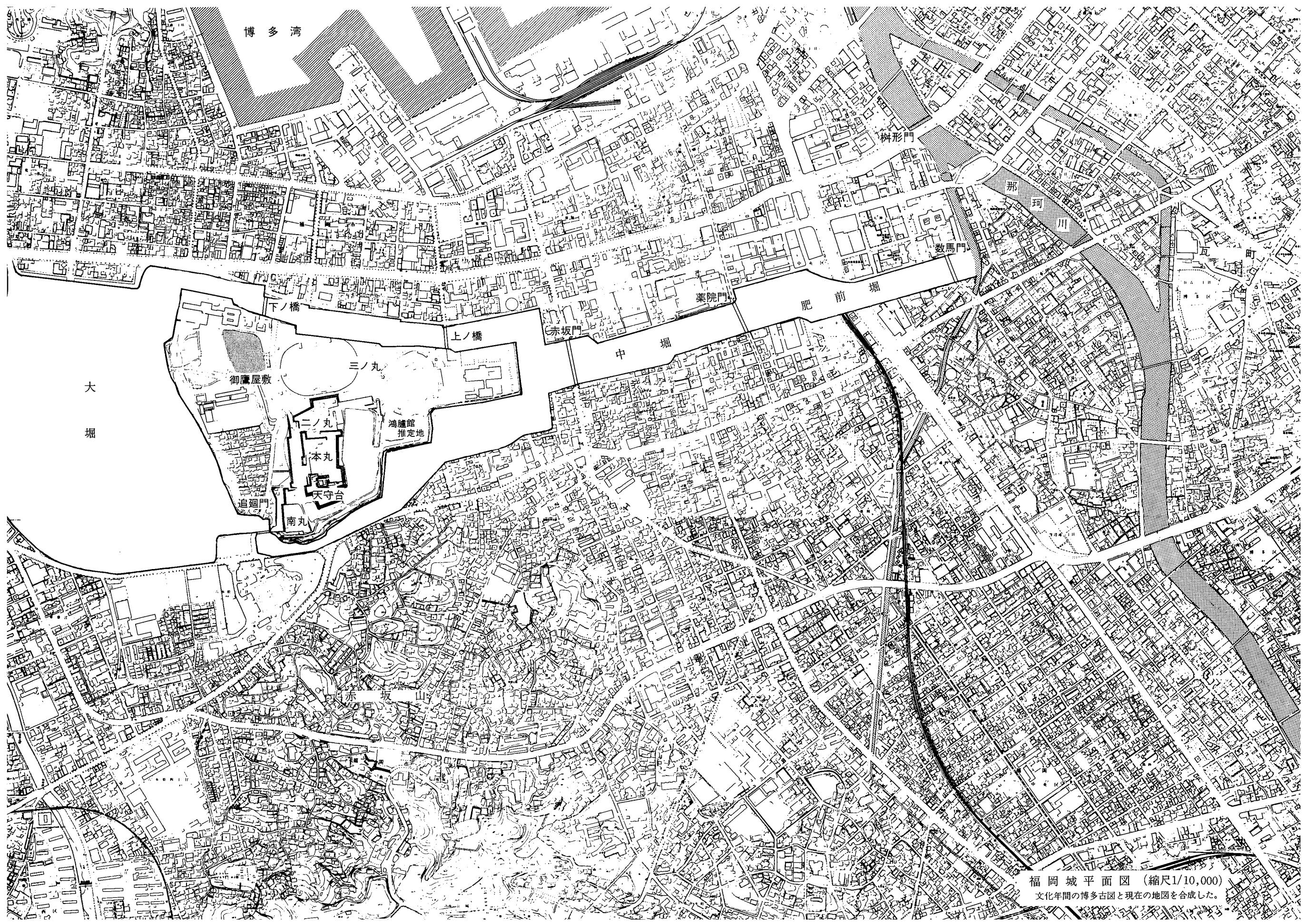
筑前国福岡城三ノ丸

7948

# 数々屋鷹印



福岡市教育委員会



## 序 文

福岡城は、慶長5年（1600年）9月の関ヶ原の戦いの論功行賞として筑前一国、52万3千石余の大名にとりたてられた黒田長政が、慶長6年（1601年）から同12年までの7年の歳月をかけて築城し、以後12代、270年にわたって藩政の中心としてその偉容を誇っていましたが、今日におきましては、大堀の城際や南東の堀が埋められ、また建物の大部分が失われる等改変のあとも少なくありません。しかし、全体の規模はなよく残存しており、高さ5～15mにおよぶ雄大に巡らされた石垣は、当時の姿をしのぶことができ、城郭史上価値ある遺跡としてその保存に万全を期するため、昭和32年8月29日、国の史跡に指定されました。

本市におきましては、この貴重な歴史的遺産を守り、現代における活用を図るとともに、末永く後世に伝えるため、昭和42年度から、城内建造物の移転、修理、石垣修理、多聞櫓の復原、環境整備等の諸事業に積極的に努めてまいりました。

本書は、昭和54年度に国庫の補助を受け、福岡市教育委員会が実施した御鷹屋敷跡（黒田如水隠棲地）環境整備に先立つ遺構確認調査の報告書であります。調査の結果、2条の溝とこれらの溝に囲まれて礎石と推定されるものが3か所で検出され、また中国製白磁・青磁、日本製の染付白磁、さらには瓦等多量の遺物が出土し、藩政時代に建物を含む何らかの施設が存在していたことが確認されました。本書が、より多くの方々にご活用いただき、福岡城の歴史解明、ひいては文化財保護の一助となれば、望外の幸に存じます。

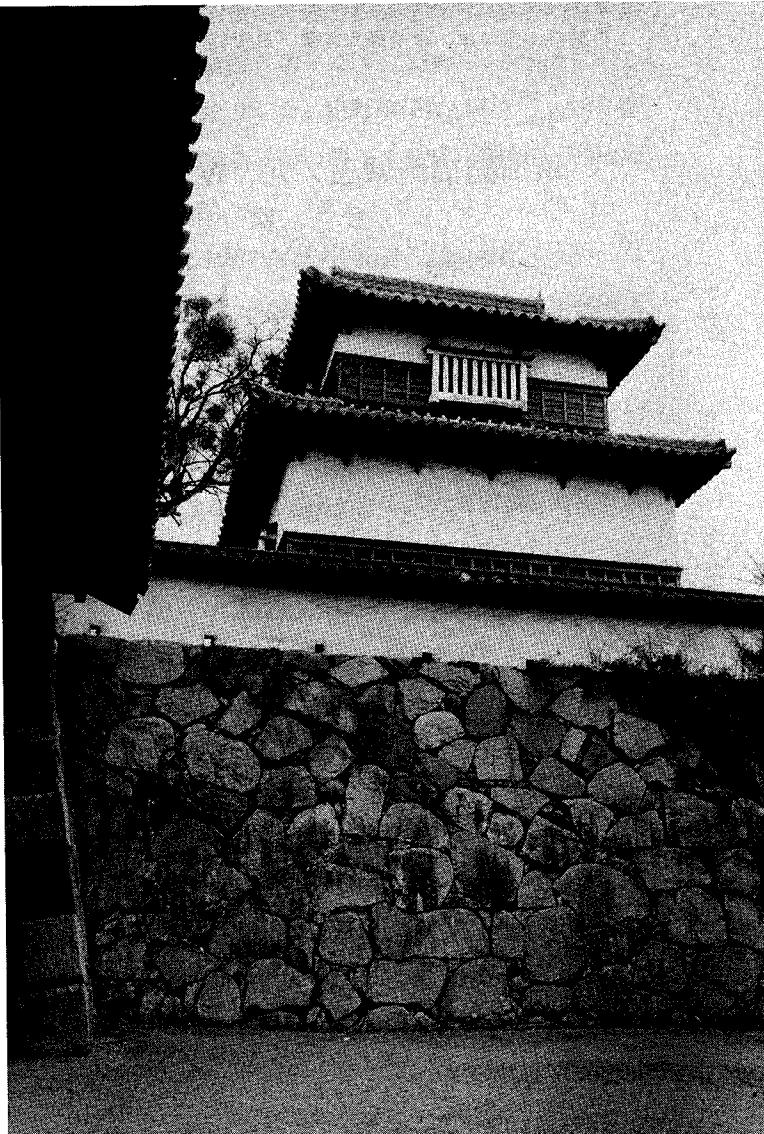
最後に、今回の調査に当たり、文化庁をはじめ、福岡県教育委員会並びに関係各位に多大なるご援助、ご協力をいただきましたが、序文を借りてお礼申し上げます。

昭和55年3月

福岡市教育委員会

教育長

西津茂美



下ノ橋大手門と  
移築された潮見櫓

## 凡　例

- ・本書は、福岡市教育委員会が昭和54年度の国庫補助を受け、1979年7月17日から8月11日にかけて調査を実施した国指定史跡福岡城跡の三ノ丸御鷹屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- ・遺跡地は、『筑前國續風土記』等に藩祖黒田如水の隠棲地として記載されているが、文化9年(1812年)の絵図に初めて現われる「御鷹屋舗」の名をとって遺跡名(御鷹屋敷)とした。
- ・遺跡の発掘調査には福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、力武卓治、岡島洋一(事務担当)が当り、本書の執筆・編集は飛高憲雄・力武卓治が行なった。
- ・発掘調査及び本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。氏名を記して感謝の意を表します。

### 《発掘調査に際して》

岩崎信也 岩崎千晶 河野徹也 木内克之 木内潤子 倉田香代子  
佐々木政子 佐藤愛子 佐藤定夫 佐藤純子 恒吉芳子 西山信子  
花畠昌一郎 花畠照子 溝口博子 山下露美子 弓削田妙子

### 《資料整理・報告書作成に際して》

岩永真弓 花畠照子 溝口博子 安武裕子 荒津孝治 河野徹也

- ・出土遺物及び検出された遺構の時代・内容検討に際しては、多くの方々から多大なるご援助を賜りました。誌上を借りて厚くお礼申し上げますとともに巻末に氏名を記して感謝の意を表します。
- ・年譜の作成には、金子堅太郎著『黒田如水傳』によるところが大であった。

## 筑前國福岡城三ノ丸 御鷹屋敷

### 目　次

#### 序文

#### 凡例　　本文目次

#### 第Ⅰ章　はじめに…… (3)

#### 第Ⅱ章　調査の記録

発掘調査の経過と概要…… (6)	1. 3号トレンチ…… (6)
2. I号溝…………… (7)	3. II号溝…………… (10)

#### 第Ⅲ章　まとめ…… (14)

#### 文献…………… (16)

#### あとがき

※表紙は「如水居士像」(慶長12年、春屋宗園による)

### 挿図目次

Fig. 1 御鷹屋敷調査区平面図 (縮尺1/600) …… (6～7)
Fig. 2 福岡大学校舎平面図 (縮尺1/600) …… (6～7)
Fig. 3 I号溝と礎石配置図 (縮尺1/100) …… (8)
Fig. 4 I号溝出土瓦実測図 (縮尺1/3) …… (9)

# 第Ⅰ章 はじめに

九州の主都福岡市は、福岡県の県庁所在都市で1889年（明治22年）4月1日の市制施行以来幾多の町村を編入して、現在は人口100万を越す大都市である。名実ともに九州の表玄関を目指す福岡市は、1972年（昭和47年）4月に政令指定都市となり、政治・経済・文化の面でも着実な発展を遂げつつある。と同時に住宅建設等のための開発が年々増大し、埋蔵文化財の記録による保存ということで発掘調査が相次ぐ昨今である。都市を構成する大部分は福岡平野と呼ばれる沖積地であるが、ここには先土器時代以降各時代の遺跡が埋没していることで知られている。また弥生時代後期頃には、邪馬台国傘下の奴国<sup>こうろかん</sup>の一部を構成していたということは定説である。奈良時代から平安時代にかけての頃には、外国使節を迎える鴻臚館<sup>こうろかん</sup>が、現在の福岡城三ノ丸の地にあったことは間違いないようである。鎌倉時代後半には、大陸からの侵入に対して博多湾沿いに防壘が築かれたり、鎮西探題が置かれたりした。室町時代になると、九州の要として九州探題が置かれた。関ヶ原の合戦後は、明治維新までの約270年間、黒田52万石の城下町として栄えた。

黒田家は佐々木源氏の流れをくむ家柄で、鎌倉時代末期の宗満の時、近江国伊香郡黒田村に住み黒田姓を名のる。室町時代終り頃の永正年間（1504年～1521年）、高政の代に故あって備前国邑久郡福岡村に移り住む。その子重隆の時には目薬売りや金貸しをやったという。後に播磨に移り、重隆の子兵庫助は赤松氏の一族で当時姫路城城主であった小寺藤兵衛<sup>まさもと</sup>政職に仕え、後に小寺氏の養子となり苗字と家紋（左三つ巴藤すなわち黒田藤）及び名前の一字に職を許され、職高<sup>もとか</sup>と名のる。職高の子官兵衛孝高<sup>よしたか</sup>は、職高のあとを継いで城主となる。大友義鎮<sup>よしげ</sup>、高山右近などと同様キリシタン大名で洗礼名をドン・シメオンという。1577年（天正5年）羽柴秀吉の中国征伐の軍を姫路城に迎え、城を譲る。1587年（天正15年）秀吉の九州平定後その軍功により豊前中津城主となるが長子長政に家督を譲り、1593年（文禄2年）48才の時剃髪して如水円清<sup>じょうすいえん</sup>と号す。豊前中津城主黒田長政は、関ヶ原の合戦で東軍につき、その戦功により1600年（慶長5年）12月に筑前一国、52万3千石余の大大名として筑前名島城に入るが、ここが手狭であったため翌年から7年がかりで福崎の地に平山城を築き、その出身地備前国邑久郡福岡の名をとって、地名を福岡と改め、城の名を福岡城（別名舞鶴城）とした。総面積は79万m<sup>2</sup>、濠周囲はPL.14,700mある。前面に博多湾という天然の外濠をもち、背後は南から延びている赤坂山を切り離して濠<sup>おいかん</sup>とし、その平面形は博多湾側を底辺とする三角形を呈し、ここに大手門を2か所設け、背後に追廻門<sup>かめてもん</sup>という搦手門を構えた点は、秀吉が朝鮮出兵の折、攻めあぐねた慶尚南道晋州市

#### 4 はじめに

にある晋州城をモデルにしたといわれる。本丸、二ノ丸、南丸、三ノ丸から成り、大中小の天守閣が予定されていたようであるが、結局建てられなかった。天守台は地階を有する形式に属し、礎石は松江城と同じ配列で、組立て寸前までいっていたようであるが、建設を急きよ中止した理由は今に至るまで謎である。<sup>注1</sup>一方、他の城にはみられない特色の一つとしては、櫓が大小47にも及んだということであるが、現在その位置と名前が知られているのは、多聞・月見・花見・潮見を初めとする10余りの櫓だけである。

さて、福岡市では本年が市制施行90周年に当るため、国指定史跡福岡城跡の三ノ丸御鷹屋敷の岡を「牡丹・芍薬園」として環境整備することになり、それに先立って埋蔵文化財の発掘調査を行なうことになった。御鷹屋敷遺跡は城内西北の三ノ丸にある小高い岡で、<sup>PL.2-1</sup>下の橋の正面に位置する。<sup>PL.2-2</sup>戦前は福岡第24連隊の将校集会所及び将校ハウス（偕行社）があり、戦後は最近に至るまで、福岡大学の二部校舎があった。

「三ノ丸御鷹屋敷」の地は、貝原益軒の「黒田家譜」<sup>1</sup>あるいは「筑前國續風土記」等によれば、ここは本丸より高かったため、地ならしして低い岡とし、藩祖黒田如水が、ごく質素な隠居所を構えていたことがうかがえるが、質素な、あるいは粗末な、との記述から考えて、また如水の生活や趣味から考えて、茶室風の建物ではなかっただろうか。ここで実際に生活をしたとすると隠居所が完成した1603年（慶長8年）から翌年の3月20日に死去するまでの間で、筑前にいた数か月ではなかっただろうかと考える。また本当にこの地に隠居所が建てられたであろうか。そしてまた隠居所が建てられたにしても、実際には、ここで生活したことはなかつたのではないか、との意見を持つ人もいる。その後、この隠居所がどのような経過をたどったかは不明であるが、「黒田續家譜」によれば二代藩主忠之以降は、日常生活の場を本丸から三ノ丸に建てた御館に移しており、少なくとも、ここを日常生活の場として使った藩主はいなかつたようである。九州大学文化史研究施設所蔵の三代藩主光之時代のものといわれる城絵図をみると、この岡には何の記載もない。<sup>PL.7-1</sup>ところが、1812年（文化9年）写しのものをみると、この岡の部分に「御鷹屋鋪」の文字がみえる。<sup>PL.7-2</sup>また別の文化年間（1804年～1818年）の博多古図によれば、「高屋敷」となっている。如水没後、この鷹（高）屋敷の地は聖地として象徴されて高屋敷と呼ばれたという考え方もあるが、如水・長政が播州から鷹師をともなってきたこと、六代藩主継高<sup>2</sup>が、將軍家継から鷹をもらい、特に鷹狩りをゆるされたこと、また多聞櫓復原修理時の発掘で、<sup>3</sup>大棟の鰐とみられるもの一部と共に、隅棟の留蓋と思われる鷹らしい形をしたものが出<sup>注3</sup>土していること、等々を考え合わせると、「御鷹屋敷」の“御”的意味するところは重要であろう。すなわち、文化9年以降に作られたと考えられる絵地図に記された「高屋敷」の文字は、単に「高台にある屋敷」ということを示したにすぎないのでなかろうか。このように考えると、少なくとも文化9年頃には、この岡の上には他の建物にともなって「御鷹」の小屋が

あったのではないだろうか。

時代は下って1895年（明治28年）11月に発行された「福岡第24連隊鎮魂紀念祭之図」をみると、この御鷹屋敷の岡の中央部に、一見櫓風の建物が描かれている。それは、西端が二層の建物で、それに接続して東へ平屋が延び、そこから直角に別棟の平屋が南に延びている。これは、すなわち福岡城時代の建物が、少なくともこの頃まで残っていたということであろう。まもなくこの岡には、前記したように、福岡第24連隊の将校集会所が、次いで将校ハウス（偕行社）<sup>PL.9-1</sup><sup>注4</sup>が建設される。将校集会所の玄関先には「如水公の手水鉢と梅の木」といわれて、将校らから丁重にあつかわれてきたものがあった。戦後は、これらの建物をもとにして増築したり、新築したりして、この岡の上全域にわたって福岡大学が利用してきた。

以上のような経過をたどった三ノ丸御鷹屋敷の岡を、前述のように今回環境整備することになり、それに伴って事前に発掘調査を行なうこととなった。城づくりが始まって2年目に、本人の希望をいれて、ごく質素に建てたとの記録がある藩祖黒田如水の隠居所の位置、規模及び遺物の検出と、記録には残されなかった、この岡のその後の利用と御鷹（高）屋敷の名の由来、及び20世紀の初め頃まで残っていたと思われる建物の内容等々を探るべく、御鷹屋敷17,000m<sup>2</sup>内の発掘調査を開始した。

注1 財団法人 文化財建造物保存技術協会 持田豊氏よりご教示。

注2 「舗」は「鋪」の正字で、「敷」と同訓。近世文書における使用頻度は7対3であるということを福岡地方史談話会幹事 安川巖氏よりご教示。

注3 多聞櫓隅棟先端直下に埋没していた石段とともに発掘されたということを、福岡市南区市民センターの田中圭介氏よりご教示。

注4 この外に如水公の馬乗石<sup>うまのりいし</sup>といわれるものがあったとのこと、山内勝也氏よりご教示。

## 第II章 調査の記録

### 発掘調査の経過と概要 (PL. 2 ~ 6 Fig. 1 · 2)

現在の御鷹屋敷の地形は、上部平坦面で南北長約 120m、東西長約 90m、標高 13m を計り周囲との比高差は 5 m の南北に長い小高い台地状をなしている。崖面の樹木はかなりの大木で明治時代以降破壊の激しかった城内では、もっとも昔日の姿をとどめている所と言える。ただ上坦部は旧陸軍や福岡大学に利用されており、その破壊程度が察じられた。調査前には福岡大学の校舎はすべて撤去され平坦となっていたものの、中庭の桜や通路の舗装はそのままとなっており、調査は予算、期間ばかりではなく、発掘場所と面積にも制限を受けることになった。このため元校舎、通路と樹木の間をぬって数本のトレンチを設定する発掘方法をとり当初の目的を達成するように努めた。まず如水隠居所にあったと伝えられている手水鉢に接して東西 57m にわたって 1 号トレンチを設定し発掘したところ校舎の基礎工事は予想以上に深くまでなされおり、遺構の確認はできなかった。ただトレンチの西端に基礎とは関係のない長さ 1.5m 程の自然石があり、その周辺から多量の瓦が出土した。ついで 2・3・4 号トレンチと掘り進み、4 号トレンチで溝状遺構のコーナーを検出した。このため西側に 5・6 号トレンチ、北側に 7 号トレンチを設定し、延長部を追求したところ溝状遺構は西側に約 50m 延びてさらに直角に北へ屈曲し、東端でも北に延びコの字形になっていることが判明した。また 8 号トレンチでは別の溝状遺構があり、1 号トレンチの瓦出土地点まで延びており、7・8 号トレンチの拡張部では礎石と思われる遺構を検出した。遺物は、瓦、陶磁器、土製品、鉄製品などでほとんどが溝状遺構より出土した。以下、3 号トレンチと内側の溝状遺構を I 号溝、外側の溝状遺構を II 号溝とし、遺構・遺物について詳述する。

### 1. 3 号トレンチ (PL. 3)

3 号トレンチの場所は、福岡大学の中庭にあたり、桜が数十本植えられその中に庭石が数個置かれていた。この庭石はかつて城内三ノ丸大音家老屋敷より出土した礎石に類似し、また等間隔で一直線に並ぶものがあり、礎石の可能性が充分に考えられた。このため石に接して発掘したところ、地表下約 0.8m で地山が現われ各時代の遺物が混在して出土した。これらのことから礎石と思われた石は、かつて礎石に使用されていた可能性は残るにしても、原位置ではな

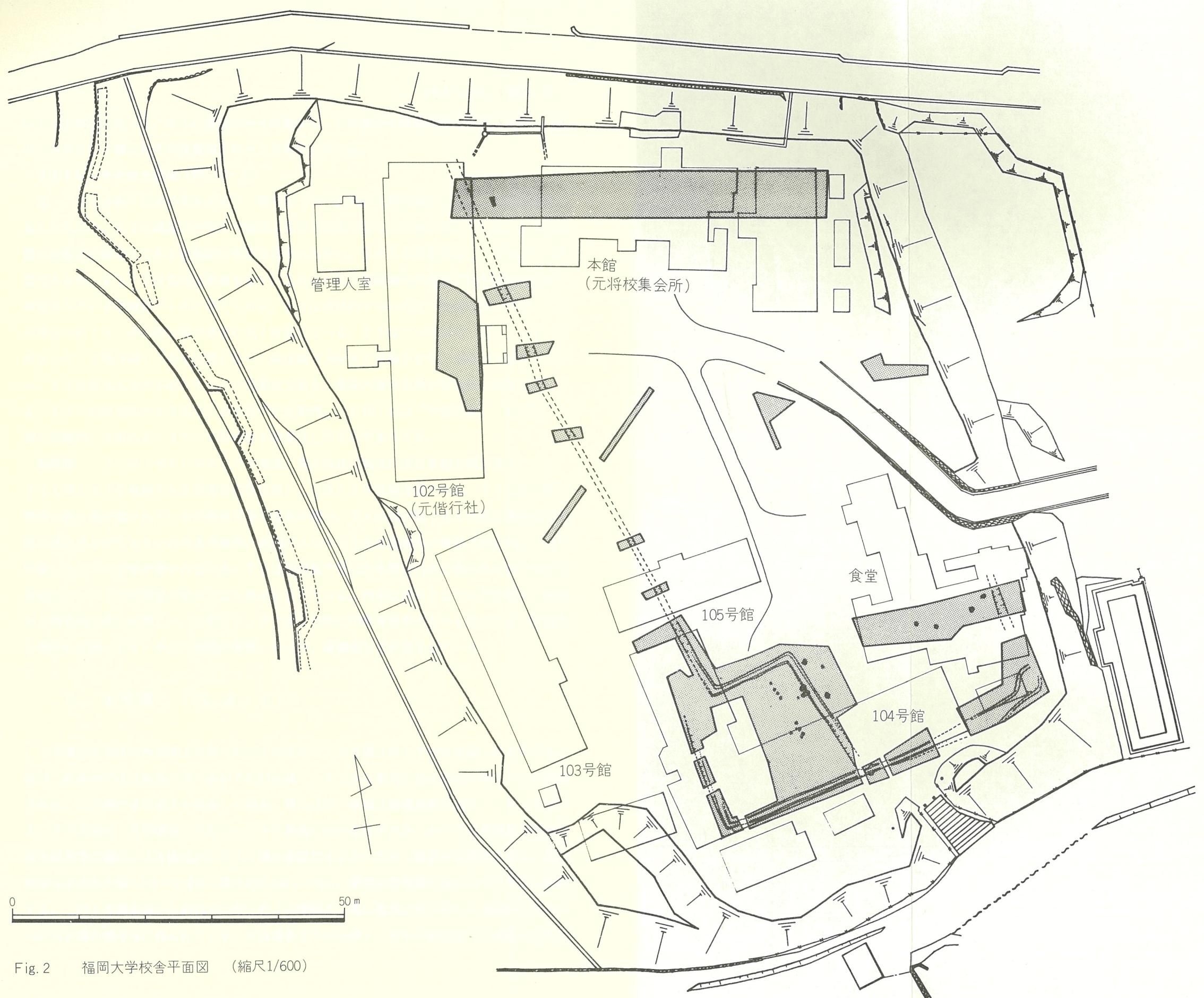


Fig. 2 福岡大学校舎平面図 (縮尺1/600)

いことが明確になった。さらに遺物の出土状態から、この部分は戦後福岡大学建設の際、一種のごみ穴として掘られその後整地されたことを示している。

### 3号トレンチの出土遺物 (PL.10・11)

**瓦** K 1は格子目文の叩きがあり、格子は  $0.5 \times 0.7\text{cm}$  で菱形格子である。裏面は布目が見られ丸瓦か。K 2は繩蓆文の叩きで裏面は布目を完全ではないが擦り消している。K 3も同様に左撫りの繩蓆文であるが裏面に布目は認められない。3点とも灰色を呈し、K 3はやや軟質であるが、K 1・2は良好な焼成をなす。これらの瓦は福岡城内の現在平和台野球場南側に推定されている鴻臚館のものと考えられる。K 4は直径約9cmの巴瓦で中高平縁の内側に9個の珠文がめぐり、中心部は縁の高さに丸く隆起している。K 5は三つ巴文で、巴は、右巻（時計まわり）で尾は細く、各々は接しない。縁は幅2.3cmあり平縁をなす。連珠文は個々が大きい。K 6は巴瓦当の小破片で左三つ巴藤文である。葉身の脈や花房が写実的に表現されている。K 7～12は刻印のある瓦で、K 9は「仁左衛門」、K 10・11は「今宿又市」、K 12は「今宿三右衛門」と読める。K 7・8は植物を図案化したものであろうか。

**陶磁器** T 1は1号トレンチ上での表採。見込内底は輪状に灰白色釉を削り取っている。T 2も同じような釉調であるが高台の背は高い。2点とも中国製白磁である。T 3は染付碗で外面に岩と梅が描かれているが焼成不良で発色が悪い。T 4は染付碗であるが胎土濃灰色で釉色も青みをおびておりいわゆる半磁器の部類に入ろう。T 5は白磁瓶の底部で高台内に「大明年製」をくずした銘が書かれている。T 6は染付皿で見込に木枝が巧みに描かれており呉須の発色もいい。T 7は灰色の胎土でよく焼きしまっている。内面は青みをおびた灰色釉で口縁部から褐色釉の流しが美しい。3号トレンチではこの外に旧陸軍使用的ものと思われる「防衛食」と書かれた碗（T 8）や三八式銃の薬莢、ナイフ、鉄製鎧などが出土している。

### 2. I号溝 (PL.4・6)

I号溝はII号溝の西南隅より東へ約22mの所から、2号溝に対してやや西偏した方向で北に延び、約20mでほぼ直角に西へ曲がり約13m続く。そこから直角に北に約12m続くことが確認される。この溝の延長線上を試掘した結果、溝はほぼ一直線に御鷹屋敷の岡をつきつけて延びる。その北端は、当初調査した北トレンチの西端にかかるはずだが、かつての将校集会所及び福大校舎等の建設による攪乱がひどく、溝は確認できなかったが、敷瓦が多数出土する。溝の断面は逆台形で幅1.0m～1.2m、深さ約0.4m～0.5m。溝底はII号溝に向かってわずかに傾斜する。このI号溝南端から約15mの所に約1m間隔で、溝に直角に長さ約2m、幅約0.5mの2つの穴が溝の埋没後に掘られている。穴は溝底より10cm深く、中から枘穴をもち洋釘が打ち込

8 調査の記録

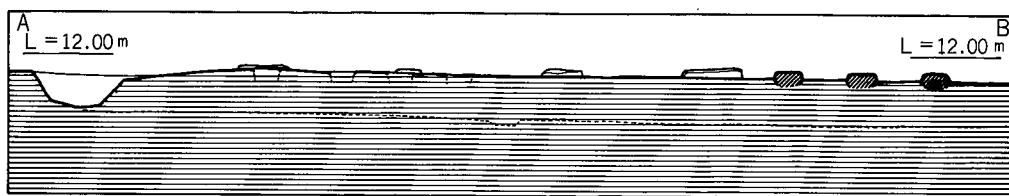
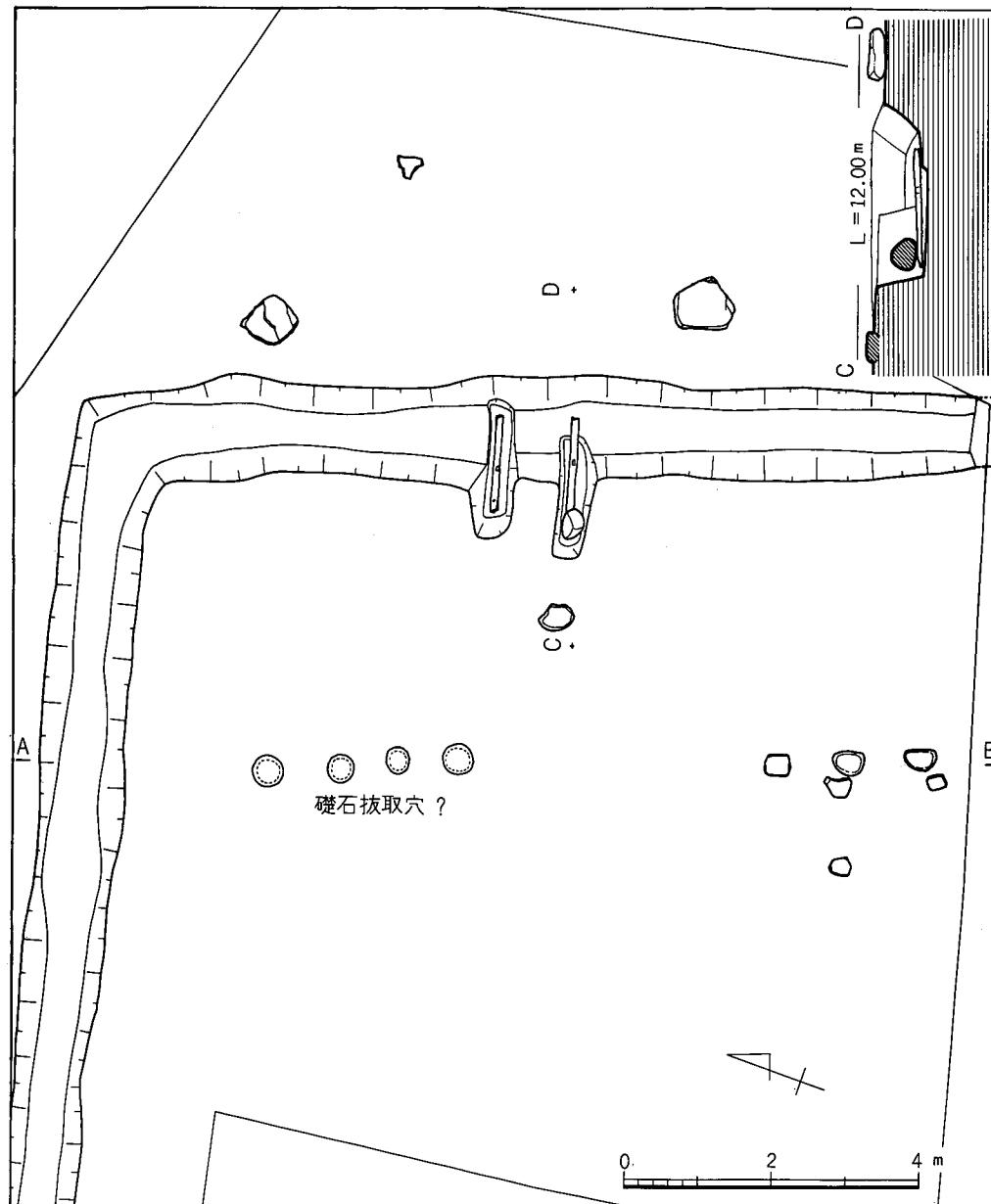


Fig. 3 I号溝と礎石配置図（縮尺1/100）

まれた長さ約1.3m、厚さ約10cmの角材が検出される。礎石と思われる自然石はI号溝の東と西に検出される。溝の東の礎石は、溝から約1mの所に溝とほぼ平行に約6mの間隔で2個並び、北の礎石(60cm×50cm、厚さ約20cm)から南へ約2mの所から東へ約2mの位置に小型の礎石がある。一方、溝の西側の礎石は全て約30cm平方の小型で、溝と平行に南から約1mの間隔で3個並び、さらに北へ約3mの所から直角に東へ2mのびた位置に1個、さらに1m東からもう1個が前記の後世の穴に転落した状態で検出される。また3個並んだ礎石の北の延長線上に近い位置に礎石の抜き取られた跡と思われる穴が1m間隔で4つ検出される。

#### I号溝の出土遺物 (PL.12~15)

**瓦** I号溝は全長約119mあるが完掘したのは8号トレンチで検出した約31mのみである。瓦の出土はII号溝に比べて少なかった。K13は平縁の内側に9個の珠文がめぐり、中心部を隆起させている。K14・15は三つ巴文でK14は直径11cm。小型巴瓦である。K16は唐草瓦で中央に筒状の細長い葉身を三枚上むきに表現している。瓦当の推定幅は約11cm。

**陶磁器** T9~14は中国製でT9・14は白磁、T10~13は青磁である。T15~20は磁器で、T15は高台径3.2cmの小碗。K16は薄手のつくりをなし、釉色は黄白色を呈する。T17~19は、

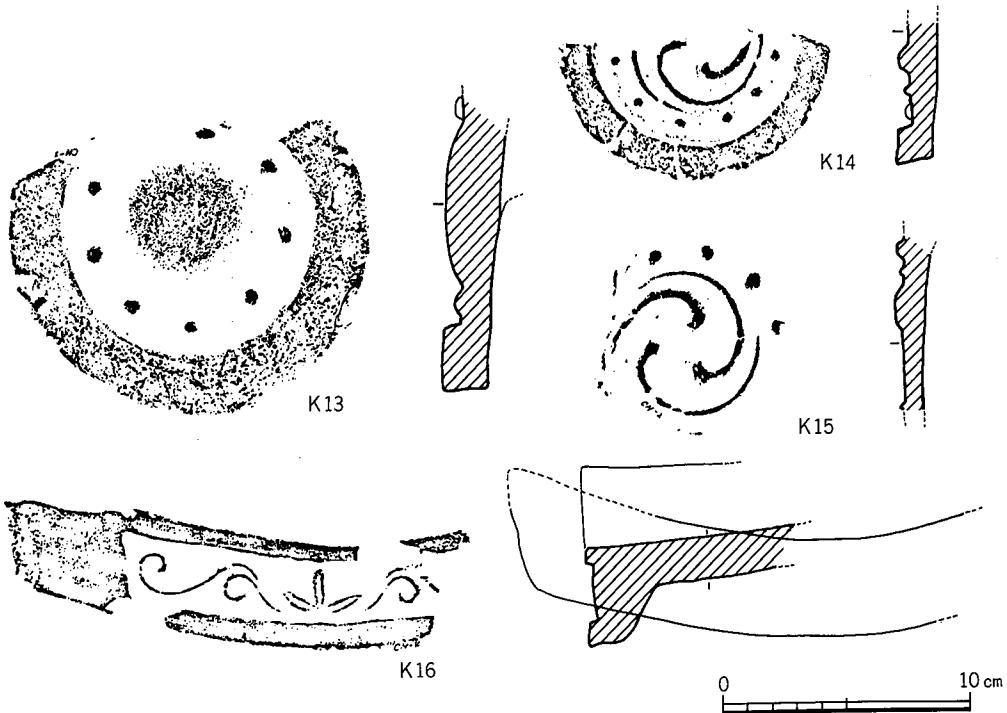


Fig. 4 I号溝出土瓦実測図 (縮尺1/3)

## 10 調査の記録

染付でT18の高台内には「大明年製」の銘が見られる。T20は皿で見込みに赤絵で如意頭文をめぐらし、中央に「寿」の字を書いている。K21~28は半磁器、陶器の碗である。T21の釉色は茶灰色で外面に鉄釉で葉様のものを描いている。T22は内外面とも刷毛目で黄白色と茶褐色の対比が美しい。T26は蛇ノ目高台の碗で、高台には刻印があるが読みとれない。K27は低い高台を持つ碗で釉は天目様の黒色を呈する。T28は大型碗で見込内底は輪状に釉を削り取っている。T29は茶入で胴上半部を欠く。底部は糸切り痕が見られ、胎土は灰褐色できめ細かい。鋳釉は胴部まで下半部は露胎となる。T30の釉は黒褐色釉で、口縁内面から外面にかけて施釉されている。T31の直立する口縁部は内面に折りまげられている。T32は胴部の破片で押圧痕のある凸帯がめぐる。内面には叩きが見られる。T33は甕口縁部でT字形をなす。T34~37は擂鉢でK34のつくりは備前焼に類似しているが、胎土の粒子は細かでやや赤みが強い。

**焼塩壺** T38・39は焼塩壺の蓋と身であるが、対になって出土したわけではない。蓋の内面には布目が見られ、身には蓋受の段がある。身の胴部刻印は長方形の枠に「御壺塩師 堀湊伊織」と読める。この外に破片が数点あり、「天下一御壺塩師……」の「天」一字をわずかに読みとれるものがある。

## 3. II号溝 (PL. 5 · 6)

II号溝は4~7号トレンチで検出した。4号トレンチの位置は御鷹屋敷の東南隅にあたり、その崖下に母里太兵衛邸長屋門が移築されている。4号トレンチで検出した溝はL字形をなし、東西長12m、南北長4.5mを計る。幅は2~4m前後あり、屈曲部が最も深く30cmあり、北、西に向かって浅くなっている。北への延長部は7号トレンチで確認できたが、屈曲部の東側肩については、この部分が福大の食堂厨房裏に位置しており、ごみ穴で破壊され検出できなかつた。4号トレンチの西側に5号トレンチを校舎基礎を避けて3か所に入れたところ、直線的に30m延びて、さらに北へ屈曲していることが6号トレンチで判明した。6号トレンチでの検出全長は13.5mで、そのまま延びているとすればI号溝に接するが校舎の基礎で著しく破壊されついに把握できなかつた。同じように東側では7号トレンチで延長部を確認できたが、さらにその北側については10・11号トレンチで検出を試みたが果せなかつた。したがつてII号溝はU形を呈し、西側で13.5m、南側で53m、東側で17m、全長83.5mの溝で御鷹屋敷の東・南崖の地形にそつて掘られた溝といえる。溝底の標高は、東屈曲部で11.69m、西屈曲部で11.93mありその差は24cmである。またI号溝の最深部は11.68mあり、規模、掘り方など大きな違いは見られない。I号溝はその南端でII号溝と接するようであるが、あいにく校舎基礎があり、I・II号溝の関係は明確にできなかつた。

### II号溝の出土遺物 (PL.16~45)

**瓦** 瓦の出土数はきわめて多量であったが紙面の関係で記載できたのは58点にすぎない。これらの瓦は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、谷瓦、敷瓦、壁瓦、鬼瓦、塀瓦に分けられる。なお軒丸瓦は巴瓦、軒平瓦は唐草瓦と総称した。軒丸瓦の文様には、三つ巴、三つ巴藤、黒餅があり3つに大分類し、さらに若干の違いにより三つ巴を三小分類、三つ巴藤を二小分類した。また、これらの瓦には文字・記号を刻印したものがあり、文字瓦として別に扱った。さらに比較資料として中山平次郎博士、高野孤鹿氏が福岡城、名島城で表採した瓦を図録巻末につけた。

**巴瓦** 三つ巴文1類 (K 17~23) 1類の巴文は右巻で小さな頭に細長い尾がつく。尾は各接続しており、あたかも圈をめぐらしたように見える。連珠文は11~13個あり、小さく突出している。瓦の直径はK 17が17.5cm、K 22が14cmあり、他の巴瓦に比べ大ぶりなつくりをなす。胎土は灰色で、やや軟質のものがある。総じて表面の風化がはげしい。

三つ巴文2類 (K 24~30) 平縁で円圏のないのは1類と同じであるが、巴文の頭がやや大きくなり、尾が離れている。連珠文もやや太くなり11~12個を数える。直径はK 24が15.1cm、K 26が13.3cmと小さくなる傾向にある。K 27~30は巴の間隔が離れすぎたり、左巻であったり、文様に違いがあるが2類の範疇に入れた。2類は胎土・焼成・手法とも1類に近似している。

三つ巴文3類 (K 31~34) 3類は三つ巴文のうちでもっとも出土数が少ない。巴の頭はさらに大きく丸くなり、尾は短くなっている。K 31は完形品で全形を知りうる。瓦当径は13.6cm、胴長22.4cm、全長26.4cm、背の高さは6cmある。玉縁は下方を向き、背は縦方向にナデられており、頭は瓦当にそって横にナデられている。裏は幅約2cmで縁どりされている。三つ巴瓦にはこの外にK 37・38のように塀に用いられたと思われるものがある。文様は1類に相当する。

**黒餅文** (K 35・36) 三つ巴文と同じように平縁の内側に珠文がめぐっているが中央部が無文でただ丸く隆起しているだけである。K 4・13も同じで、三つ巴・三つ巴藤瓦よりも厚手のつくりをなす。黒田家家紋の一つである黒餅紋を表現したものと考えられる。

三つ巴藤文1類 (K 39~44) 左三つ巴藤はいわゆる黒田藤と呼ばれる家紋である。黒田藤は、播州での主家であった小寺家より与えられた小寺家紋の藤と黒田家のそれまでの家紋であった橘紋を組合せたものと言われている。御鷹屋敷出土巴瓦の黒田藤は、花房の表現に写実的なものと粗略化したものとがある。1類は写実的に表現されているものである。K 39は完形品で瓦当径15.3cm、胴長26.5cm、背高7cmあり、玉縁の勾配は水平に近いが3cmと短い。背に「李兵衛」の刻銘がある。K 44は塀に使用されたと思われる巴瓦で直径10cmある。丸瓦との接着は、芋付け法と呼ばれる方法で縦・横の櫛目が見られる。

三つ巴藤文2類 (K 45~53) 1類に比べ花房の花が数少なくなり、中央の葉、花房とも幅広くなる。全体的に粗雑なつくりをなす。1類より直径がやや大きいのが多いようである。

## 12 調査の記録

唐草瓦（K 54～64） K 54～62の中心飾には各々違いがあるが、すべて唐草が左右対称に出る均正唐草である。K 54は頭幅26.1cm、瓦当幅 4.2cm、厚さ 1.7cmある。瓦当における模様の占める率は約 $\frac{1}{2}$ である。頸の厚みは約 1.5cmと薄く、深さも 2.3cmと浅い。側面切口は垂直切りである。K 59もほぼ同じ形状を示す。中心飾には植物の葉三枚を表現しているが、上向き、下向きのものがある。K 63・64は黒田藤巴瓦と対になるものであろう。K 60は瓦当模様が傾いているが、破風に使用されたものと考えられる。

丸瓦（K 65～67） 玉縁のつく丸瓦である。K 65はほぼ完形で頭幅13cm、尻幅13.9cm、胴長23cmある。裏面は全周を面取りしており、縦のヘラ痕が見られる。K 66の胴の長さは30cm以上とさらに長くなる。厚さも 2.5cmと厚手なつくりである。内面の面取りは幅広く、布目は残るが縦のヘラ痕はない。背に「今宿三右衛門」の刻銘がある。K 67の玉縁勾配は水平に近く、4cmと長い。内面に紐痕が見られる。尻幅16.4cmあり大型の丸瓦である。焼成はいずれも良い。

敷瓦（K 68） 長さ24.5cm、厚さ 3.2cmの板状の瓦で、側面には打ち割るための傷痕が見られる。完形品は方形をなすのである。このような瓦は敷瓦として福岡市崇福寺や姫路城天守台水三門などに使用されており、特殊な瓦といえる。焼成はよく歪はない。3号トレンチ出土。

壁瓦（K 69） 厚さ 2.6cmの板状の瓦で、釘穴があることから壁瓦と考えられる。倉、堀などの壁に貼りつけられるもので、釘や漆喰で止められる。金沢城では門壁に使用されている。

谷瓦（K 70） K 70は谷瓦で厚さ 1.5cm、垂れの長さ 3cmを計る。尻と垂れとの位置関係から左の谷瓦である。この瓦は棟が直角になった谷に葺かれるもので建物の構造が推測される。

埠瓦（K 71） 瓦に埠瓦という呼称はないが、埠に葺かれた瓦という意味で用いた。一部を欠いているが、厚さ 2.7cmで32cm程度の方形板状をなす。その一端に幅 5.8cmで断面L字形の重ね部をつくる。図の上部側面は面取りがなされ釘穴が1か所に見られる。

鬼瓦（K 72～75） 出土品には完形の鬼瓦はない。福岡城を撮影した明治初期の写真には、鬼瓦が見られるが、その形状については不明な点が多い。現在残されている城内の潮見櫓、崇福寺に移築された花見櫓などの鬼瓦には黒餅紋が使われている。また南丸多聞櫓は解体復原されたがその際に南西隅櫓石段より鷹と思われる鳥の留蓋が出土し、さらに鏡も保存されている。K 72～75は鬼瓦の破片である。K 73は黒餅紋鬼瓦の中央部で裏面には固定するための龍頭がある。その大きさから大棟の鬼瓦であろう。K 72は鬼瓦右側の足、K 74は鬼瓦左側の足である。

文字瓦（PL. 36～39、47） 出土瓦の刻印には、瓦師の名と思われるものと、菊花文などの記号化されたものとがある。これらは丸瓦の背や平瓦の谷・小口、巴瓦の瓦当縁に見られ、丸瓦の例が多い。人名には「九郎左衛門」「市右衛門」「伊左衛門」「長左衛門」「仁兵衛」「三郎右衛門」「甚左衛門」「惣兵衛」「李兵衛」「彦兵衛」などがあり、高野孤鹿氏が福岡城内で表採した文字瓦には「長左衛門」「李兵衛」など同一名のものがある。

**陶磁器** T40は玉縁口縁の中国製白磁碗、T41・42は中国製青磁で、T42は盤で裏葉色の釉は畳付をのぞいて全面にかけられている。胎土は灰白色を呈し黒い細粒子が入っている。T43～50は染付でT43～46は碗、T47～49は皿、T50は鉢である。T43の外面には素朴な表現で草花を描いている。T45はT3と同じ文様である。T47は高台内に銘があり角福であろう。T48は「大明成化年製」であろう。T50には「嘉靖年製」の銘がたしかなタッチで書かれている。同じような文様が内外面に見られる。木葉の葉脈を呉須で先に描きその間を呉須と赤絵で埋めている。さらに赤絵の点文で半球状の文様を描いている。T51～75は半磁器・陶器で高取焼が多い。T52はT22と同様に内外面とも刷毛目で縞文様をなす。T54は薄作で外面は褐色釉、内面は濁白色釉である。T55の胎土は淡黄色で体部の内外面に灰白色の釉がかけてあるが生焼のようである。T56・57は茶入で、T56の胎土は褐色できめが細かい。ほぼ直立する胴部に丸みのある肩がつき口縁は小さくおさめる。薄作で纖細な姿をなす。T57は底部で内外面とも露胎で赤茶色を呈している。底部は切離し後ナデられ平坦となる。下半部は削りが加えられており、内面は凹凸がめだつ。T58は粗い削りの底部から大きく外傾する体部がのび、そのまま口縁部をつくる。釉は緑灰色で外面口縁下半部には施釉されない。見込には黒色釉文様の一部が見られ、内底には3か所に帯状の目跡が残っている。T59は薄作で胎土は灰色を呈している。釉は灰色をおびた黄茶色で全面にかけられている。T60の口径は14cmで外面はやや凹凸がめだつ。口縁は丸みがあり、灰黄色釉は全面にかかる。T61は口径10cmの壺形をなす器形で頸部は直立し丸みのある口縁をつくる。口縁部内面は茶灰色釉、外面は黒褐色釉がかけられている。T62は胴下半部にふくらみを持つ器形で、口縁部は外に丸くつきだしている。T63は水指の底部であろう。胎土は灰色で、釉まわりが悪い。T64の胎土は黒みをおびた灰色で、胴下半部には削りを加えている。T65は朝顔状に開く器形で、濃茶色の釉は口縁部のみにかけられている。T66はL字形口縁で、直下に三角凸帶を1条めぐらしている。内外面とも施釉され緑色をおびた暗茶色を呈する。T67は胴のはる甕の口縁部で、胎土は濃灰色を呈し露胎のままである。T68は特異なつくりの口縁で、内面に櫛で波状文を描いている。T69～75は擂鉢である。T69は幅広い口縁部で内面に小さな凸帶がめぐる。T73は施釉されず明橙色をなす。胎土には砂粒を含む。T74は灰色の胎土でよく焼きしまっている。T75には背の高い高台が貼りつけてある。

**焼塩壺** T76～80は焼塩壺の蓋である。口径7.4～8.5cmで深さ0.7～1cmある。胎土には小砂粒を含入り、外面の色は赤みをおびた白黄色や明赤茶色をしている。内面には布目が見られ上面は平坦をなす。K78は内面の布目細かく、よく焼きしまっている。

**土製人形** T82は型押した人形で肌色を呈する。頭部を欠いているので男女の判別はできないが、深く腰をしづめて座り、両膝に手を置いている姿から男性のようである。胎土は白黄色を呈し、焼成はよい。彩色した痕跡は見られない。厚さは5mm程である。博多人形の祖形か。

## 第III章　まとめ

以上報告した調査結果に基づき、調査成果と問題についてまとめてみたい。まず出土遺物の瓦、陶磁器、焼塩壺より考えられる年代観、さらには建物の規模・構造について記し、これから考えられる御鷹屋敷の現代に至るまでの変遷について考えてみたい。

**瓦** 福岡城築城の際使用された瓦には名島城の瓦も利用されたという推測は、両城で同じ瓦が出土することをもってなされるが、大半は黒田長政の筑前入国に際して播州より同行した瓦師の專業集団が活躍したことがしられている。この瓦師には山崎権右衛門、喜多村甚左衛門、山崎彦兵衛、正木仁兵衛、正木彦左衛門等があげられる。なかでも前二者は、長政の父孝高(如水)が豊前中津に封を移した時以来の瓦師である。いずれの瓦師も居を博多瓦町に構え、明治初期頃まで代々福岡城に瓦を納めていた。そのため苗字帶刀を許され、丁役も免除されていた。山崎権右衛門家、正木仁兵衛家等では、二代目から分家が相次ぐ。17世紀末頃には今宿でも盛んに瓦が焼かれるようになる。正木家から分家した三右衛門は今宿三右衛(エ)門という刻印を瓦に押した。1909年(明治42年)以降は現在の横川家が引継ぐが、刻印はそのまま今日も受継がれている。当主横川繁義氏の話によると、今宿では1935年(昭和10年)頃まで今宿市右衛門の刻印で城園市右衛門氏が瓦を焼いていたといい、また、明治になってから城園家から分家したと思われる今宿又市銘の瓦工場もあったそうである。このように瓦師の家系はその一部ではあるが現在まで辿ることができる。出土した文字瓦には甚左衛門、彦兵衛、仁兵衛、市右衛門、惣兵衛、今宿三右衛門など系図と同じ人名のものがある。これらを早急に系図と同人物とはすることはできないが、もし城内の瓦の供給がこれら瓦師のみからとすれば福岡城築城時まで溯ることになる。一方、多聞櫓修理工事報告書によると瓦を形式・形状等から慶長頃、江戸中頃、嘉永頃、明治以後の四期に分類されている。これによると当遺跡出土瓦のほとんどは慶長、江戸中頃に該当する。このように瓦からは築城時から江戸中頃という年代が考えられる。

**陶磁器** 出土した陶磁器には中国製白・青磁が含まれているが、ごく少数である。染付は古伊万里系であり、陶器には唐津系、備前系と思われるものもあるが大半は黒田藩の御用窯であった高取焼である。高取焼十四代亀井源八郎味楽氏の分類によるとT55は慶長19年開窯の内ヶ磯窯産、T7・56・59・60・62・63は寛永7年開窯の白旗山窯産、T51・54は寛文5年開窯の小石原窯産、T21・22・29・52は宝永5年開窯の東皿山窯産ということであり、特にT29は当家に伝わっている東皿山高取耳付茶入に類似の優品である。このように本遺跡の陶磁器は江戸初期まで溯るものがあり、擂鉢など日用雑品もあるが茶席の器類が多いことが特長といえる。

**焼塩壺** わが国でも食生活の変化とともに塩が求められるようになるが、天然の岩塩がなかったため海水を利用した製塩が、東日本では繩文時代後期に、西日本でも弥生時代後期に始まる。塩はそのまま長く置くと、溶けて苦い汁がにじみ出るため、この苦汁しつけを取り除く必要が生じる。そのために考案されたのが、塩を素焼きの壺に入れて蒸焼きにすることであった。この方法で作られた塩は粒が細かく、純白でさらさらし、食卓塩として使用された。

焼塩作りは、文献によると16世紀の中頃から堺の湊村において始まり、ここで作られた焼塩が壺に入れられたまま回船等で全国各地に運ばれたようである。

堺の焼塩壺に関しては、『堺鑑』土産之部に「湊壺塩」として以下のように記載されている。

『今、壺塩屋先祖ハ昔年ハ藤太郎トテ猿丸大夫ノ末孫ト云リ花洛上鴨畠枝村ノ人也シテ天文年中ニ当津湊村ニ来リ住居シテヨリ以来紀州雜賀塩ヲ求メ土壺ニ入テ焼反諸國ヘ商売シテ

壺塩屋藤太郎ト号シ世ニ広用故ニ今ニ至迄其子孫相続ス承応三年甲午ニ女院御所ヨリ天下一ノ美号不苦トアリ時ノ奉行石河氏是ヲ承リ頂戴ス又延宝七年ノ此ニハ鷹司殿ヨリ折紙アリ、呼名伊織ト号ス』

この記事からわることは、16世紀の中頃すなわち堺が経済の中心地として栄え始める頃に壺焼塩の製造販売が開始され、1654年（承応3年）に女院御所（源和子、徳川秀忠の女、後水尾天皇の中宮）から“天下一”の美号を受けて天下一……の刻印を使い始め、1679年（延宝7年）鷹司殿より“伊織”的屋号を受け、壺に堺湊伊織の刻印を使い始めたということである。

また美号“天下一”的使用の下限は、使用を禁止される1682年（天和2年）であり、壺塩師伊織八代目の時、灘波に支店を出し、やがて本店となる。このため1738年（元文3年）には壺の刻印が堺湊伊織から泉湊伊織に変わる。今回御鷹屋敷遺跡で出土した焼塩壺数個体分中天下一……の刻印のあるものは三代藩主光之の時代に当り、もう1つの御壺塩師堺湊伊織の刻印のあるものは三代藩主光之から六代藩主継高の時期にかけてのものといえる。

この焼塩が詰められていた焼塩壺は最近の調査によると福岡県から青森県に及ぶ50か所以上の遺跡から出土しているが、福岡県八隈遺跡では泉湊伊織の刻印のあるものが報告されている。<sup>18</sup>ほとんどのものは塩を食した後廃棄したと考えられる状態で出土しているが、堺市の淨光寺出土のものの中には、焼塩壺の体部に経文・戒名・梵字が墨書きされたもの、また蓋が供物用器の代用として蔵骨器に入れられた例もある。また京都では坩埚<sup>19</sup>に転用された例もある。

このような壺による焼塩作りは19世紀の終り頃まで続いた。<sup>20</sup>

一方、記録によれば、筑前國ではすでに平安時代より姪浜で製塩が行なわれていたが、長政の入国後はさらに盛んになり、姪浜以外数か所でも焼かれた。長政の時には江戸桜田の館に塩蔵を建てて塩を貯蔵したが、その後はわざわざ国元から取り寄せることがなかったようである。この桜田の館があった現外務省敷地内から焼塩壺が2つ出土している。1つは江戸初期のもの、もう1つは江戸末期のものである。すなわち、塩の産地でも壺焼塩を入手していることがわかる。これは壺焼塩がいかに美味しいものであったかを示すものであろう。

以上のように遺物については福岡城築城時まで溯るものもあるが如水隠居所と直接結びつくものはない。ただ1号トレチ西端で敷瓦と思われる瓦が多量に出土したが、敷瓦が特殊な場所にのみ使われるということ、さらには手水鉢があるということなどからもし本遺跡の一角に隠居所を求めるすれば、1号トレチ付近がもっとも有力な場所と言えるであろう。本遺跡のその後については先にも記したごとく城絵図に御鷹屋敷、高屋敷という名があるのみでその実体については一切記録されていない。ついで出てくるのが明治28年の「福岡第24連隊鎮魂紀念祭之図」の石版画である。この石版画はあくまで絵であるが昭和6年の航空写真<sup>PL.92</sup>と比較すれば兵舎などの建物がみごとに一致しており、石版画はかなり信頼性のある絵といえる。本遺跡出土の壁瓦・堀瓦・谷瓦・鬼瓦などの瓦から考えられる建物の構造とこの石版画に描かれている建物の構造とは大きく異なる点はない。ただ石版画の建物の位置については、I号溝が真下を横切ることになり、I号溝とは時間的な差を考える必要がある。したがって本遺跡は1. 如水隠居所 2. I・II号溝に伴なう建物 3. 石版画に描かれた建物 4. 将校集会所・偕行社 5. 福岡大学校舎という大きく五期に分けられ変遷してきたことになる。ところで本遺跡がなぜ御鷹屋敷、高屋敷と呼ばれたかについては、鷹との関係を推測したが発掘によっては裏付けることはできず依然謎のまま残された。また発掘の所見では建物が存在したことは確かであるが文献等に一切記録されていないのはどういうわけであろうか。この2つの問題は、本遺跡の建物の実体「城内の中でどのような性格を有していたか」を追究することによって明確にできるであろう。ところで最後になったが、将校集会所がいつ建てられたか、つまり石版画に描かれた建物のこわされた時期については、明治年間のごく最近のことでありながら記録されていず、歴史の流れの速さとともに記録の重大さを痛感した次第である。

## 文 献

- 《福岡城・黒田如水について》
1. 貝原益軒「黒田家譜16巻」『益軒全集』(全8巻) 益軒全集刊行部 1911年2月
  2. 『黒田新續家譜』
  3. 檜垣元吉「九州城下町古地図集－福岡の城下町－」『九州アカデミー』第1号 文画堂  
1960年5月
  4. 高野孤鹿『平和台の考古史料』(一) 1972年7月
  5. 貝原益軒『筑前國續風土記30巻』名著出版(全1巻) 1973年9月
  6. 青柳種信『筑前國續風土記拾遺(30巻)』筑前國續風土記拾遺刊行会(全5巻) 1973年10月
  7. 金子堅太郎『黒田如水傳』文献出版 1976年11月
  8. 加藤一純・鷺取周成『筑前國續風土記附録(50巻)』川添昭二校訂(全3巻) 文献出版  
1977年10月
  9. 筑紫豊『博多と茶湯』文献出版 1978年
  10. 司馬遼太郎『播磨灘物語』(全4冊) 講談社文庫 1979年2月
  11. 吉川英治『黒田如水』吉川英治文庫 1979年2月
  12. 橋本政次『姫路城の話』姫路観光協会 1979年10月
  13. 内藤昌『城の日本史』日本放送出版協会 1979年
  14. 『長政公御入國より二百年町家由緒記』  
《焼塙壺について》
  15. 前田長三郎『堺焼塙壺考』1931年6月
  16. 清水保男「茗荷谷-M独身寮新築工事異聞-」『建築工事の施工監理』第2巻第11号  
1965年11月
  17. 森浩一「姥柳町遺跡(南蛮寺跡)調査概要」『同志社大学文学部考古学調査記録』第2号  
同志社大学文学部文化学科考古学研究室 1973年8月
  18. 松村一良「福岡県筑紫野市所在八隈遺跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』  
VII 福岡県教育委員会 1976年7月
  19. 川口宏海・小山繁夫・中島健吾「堺市淨光寺出土の焼塙壺について」『陵』3・4号合併号  
仏教大学考古学研究会 1977年3月
  20. 日本塩業大系編集委員会『日本塩業大系』  
《瓦について》
  21. 小田富士雄『福岡市福岡城跡採集遺物調査報告書』福岡市教育委員会 1961年3月
  22. 福岡市『重要文化財 福岡城南丸多聞櫓修理工事報告書』1975年3月
  23. 坪井利弘『図鑑 瓦屋根』理工学社 1979年1月
  24. 坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社 1979年1月  
《博多人形について》
  25. 橋詰武生「博多人形の起源と系譜」『博多のうわさ』30巻9号 1964年
  26. 江頭光『博多人形のしおり』1978年5月  
《紋章について》
  27. 渡辺三男『日本の紋章』毎日新聞社 1976年11月  
《高取焼について》
  28. 永竹威「上野・高取」『陶磁大系』15 平凡社 1975年2月
  29. 永竹威『茶陶高取-龜井味楽の系譜と伝統-』福岡市無形文化財高取焼技術保存会  
1979年2月

## あとがき

炎天下、20日余りの調査ではありましたが、多くの方々のご協力を得て所期の目的を達成し、本書をまとめることができました。今、御鷹屋敷では調査成果を設計に生かし、牡丹・芍薬園作りが進められております。いつの日にか、地下に眠る遺跡の全貌が明らかにされるものと思ひます。また、本書作成に当っては、次の方々から多大なるご援助を賜りました。（敬称略）

### 《福岡城・黒田如水について》

田坂大蔵（福岡市美術館） 田中圭介（福岡市南区市民センター）

### 《福岡第24連隊について》

桜井徳太郎（福岡連隊会顧問） 樋口次三郎（福岡連隊会顧問） 高原協三（福岡市立舞鶴中学校） 野口和三（陸上自衛隊福岡駐とん地広報史料館） 和泉信男（陸上自衛隊福岡駐とん地広報史料館） 安川巖（福岡地方史談話会幹事）

### 《瓦・瓦師・博多人形・惣七焼について》

有田諦弘（善導寺住職） 坪井利弘（坪井設計） 持田豊（財団法人 文化財建造物保存技術協会） 横川繁義（今宿三右エ門製瓦工場）

〈瓦師山崎家について〉 山崎宗一郎 〈瓦師正木家について〉 正木三子生

### 《焼塩壺について》

岩崎均史（たばこと塩の博物館） 後藤直（福岡市立歴史資料館） 森村健一（堺市教育委員会） 渡辺誠（名古屋大学文学部）

### 《備前焼・高取焼について》

亀井源八郎味楽（高取焼第14代・福岡西新窯元） 間壁忠彦（倉敷考古館館長）  
間壁葭子（倉敷考古館）

## 筑前国福岡城三ノ丸 御鷹屋敷

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第59集

©1980年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目7-23  
電話 福岡 (711)4667 (文化課)

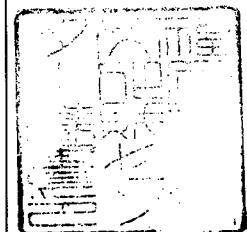
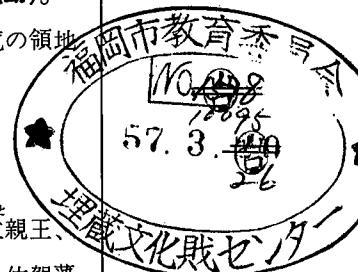
印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

裏表紙のカットは御鷹屋敷出土の瓦当文。

## 黒田官兵衛孝高(如水)関係略年譜

西暦	年号	事項
1546	天文15	播州姫路城で小寺職隆の嫡子として生まれる。
1568	永禄11	23才 長子長政生まれる。
1575	天正3	30才 長篠の合戦の後岐阜に行き、織田信長に会う。
1577	5	32才 羽柴秀吉の中国征伐の軍を姫路城に迎え、姫路城を献上する。
1578	6	33才 荒木村重の謀叛説得のため、単身伊丹岡城に赴き捕われる。
1579	7	34才 栗山膳助(29才)、母里太兵衛(24才)らに救出され、秀吉の参謀として中国征伐に加わる。
1582	10	37才 備中高松城攻略。本能寺の変(信長48才)。
1587	15	42才 秀吉、九州平定。孝高、豊前中津城主となるが長政に譲る。
1593	文禄2	48才 孝高、剃髪して如水円清と号す。
1598	慶長3	53才 豊臣秀吉没(63才)。
1600	5	55才 9月15日、関ヶ原役。11月18日、如水中津に帰る。12月8日、中津より博多へ移る。(如水は神屋宗湛宅へ。長政は徳永宗也宅へ。如水の弟、黒田養心の嫡子修理は名島城へ。)12月11日、如水・長政父子、名島城へ入る。12月末日、如水、大坂で徳川家康と会見の後、京都へ行く。
1601	6	56才 5月25日、如水、筑前に帰る前に連歌の会を催す。如水、名島城に帰らず宰府で閑居。(菅公祠前の鳥居の東に草庵。)長政、この年から7年がかりで福岡城(舞鶴城)を築く。内城の広さ約24万m <sup>2</sup> 、大小の櫓47に及ぶ。10月9日、長政、鳥飼村に別館を建てる。(茶屋の山、女子師範学校。)如水を宰府より招待して茶会を催す。11月28日、大宰府郊外で耕作していない畑を見つけ、郡代官に書を送り、農民を戒める。
1602	7	57才 1月15日、神屋宗湛宅で茶会。1月16日、連歌の会。長政、領内検地に着手。名島城より福岡城に移る。夏、如水、長政の妻を連れて上洛。8月26日、猪熊の閑居(伏見の藩邸)にて連歌の会。9月、筑前に帰る。11月9日、孫忠之生まれる。12月25日、箱崎の茶寮で茶会。(神屋宗湛、宗室、徳永宗也、原道哲。)
1603	8	58才 この年に長政、城内の北西、三ノ丸の小高い岡に如水の希望を

		入れて、ごく質素な家を建てる。正月、如水、大坂に政所(秀吉未亡人)を慰問する。2月2日、大坂より帰国。4月29日、神屋宗湛の茶会。5月23日、旧主小寺政職の嫡子氏職に隠居料をさいて、勘忍料を与える。(三笠郡紫村の内、64石7斗6升8合。)秋(9月)、伏見の藩邸へ。10月京都にて病。宗湛病気見舞として博多より種々の物品を贈る。11月、有馬温泉にて療養。伏見の藩邸にもどる。
1604	慶長9	59才 2月、如水の病気重くなり、長政上洛する。長政と栗山大膳に訓諭。栗山に合子の甲と唐皮の胄を譲与する。 <b>3月20日、如水予言どおり辰の刻(午前8時頃)に逝去。</b>
1607	12	6月12日、長政、国中の掟を定め、博多に制札を立てる。
1614	19	10月、大坂冬の陣。
1615	元和1	4月、大坂夏の陣。5月、豊臣氏滅ぶ。
1616	2	4月、徳川家康没(75才)。
1623	9	8月4日、長政没。嫡子忠之遺領相続。次男長興5万石(秋月)三男隆政に4万石(東蓮寺)分封さる。
1627	寛永4	8月26日、如水夫人没(75才)。
1632	9	6月14日、栗山大膳、幕府に藩主忠之に謀叛の企てありと訴えるが幕府による調査で、叛意のないことが判明(黒田騒動)。
1677	延宝5	東蓮寺藩主黒田長寛、三代藩主光之の嫡子となり、長寛の領地は光之に返される。(東蓮寺藩消滅)。
1701	元禄14	5月、福岡藩国絵図を幕府に提出。
1867	慶応3	<b>10月15日、大政奉還。12月8日、王政復古の大号令。</b>
1871	明治4	7月14日、廃藩置県の詔。福岡県となる。有栖川宮熾仁親王、知事として着任。城内三ノ丸の下屋敷を県庁舎とする。佐賀藩の歩兵一大隊駐屯。
1874	7	歩兵第11大隊分遣隊移駐。
1876	9	歩兵第十四連隊第三大隊の設置。
1886	19	歩兵第二十四連隊駐屯。
1945	昭和20	城域、大蔵省の所管となる。
1957	32	<b>8月29日、福岡城跡、国指定の史跡となる。</b>



540

2

